

# 学びの一体化・連続におけるカリキュラムの編成についての考察

## —三重県名張市の一貫教育の取り組みを手掛かりに—

長澤 貴 田口 鉄久

### 要旨

学校間連携、学びの一体化・連続が議論される中、カリキュラム編成の研究は、「カリキュラムマネジメント」が次期指導要領で導入されることによって転換点を迎える。一つは、学校間の連携・一体化だけでなく、領域・教科間横断のカリキュラムが求められることにより、そのような横断的なカリキュラムの構築についての研究が求められること。もう一点は、どのようなカリキュラムを編成するかというカリキュラムの内容に関しては、学校の主体性に任せられることにより、カリキュラム編成の方法とカリキュラムマネジメントの方法へと研究が転換する。本稿では、三重県内の事例をもとに、この2点についての考察を行った。

キーワード：幼保小連携 小中一体化 カリキュラム編成 カリキュラムマネジメント

### 1. はじめに

本稿では、幼保小連携、小中一体化といった学校間連携におけるカリキュラムの在り方、その編成の仕方について考察する。

学校の統廃合による施設の一体化の促進や学校間での情報交換を超え、連携・一体化のためのカリキュラム編成を進めようとする取り組みがある。このような、カリキュラム編成をも含んだ学校間の連携・一体化が進められる背景には、一つ目として、小1プロブレム、中1プロブレムといわれるような学校間のギャップから生じる学校への不適応、不登校問題の解消を企図しようとするものがある。そして二つ目としては、学力向上、学習内容のスムーズな連携など、教育の質の保障、または特色化を目的とし学校間の連携・一体化を進めようとする試みである。

学校間のギャップを埋めようとする学校間連携の試みに関する研究としては、赤木らの松江市における保幼小連携カリキュラムの検討[赤木ら, 2016]や、特別な支援を要する子どもへの支援という観点も含め、「人間関係」領域と小学校の「生活科」との連携を考察したもの[伊勢, 2016]、「表現」領域と小学校の音楽科との接続、連携を京都幼稚園と京都女子大学付属

小学校との連携の事例をもとに考察したもの[岡林ら, 2014]がある。さらに、保幼小の連携においては、小学校からの視点に立ち、「生活科」を幼小の連携のスタートカリキュラムの中核と位置づけ、「環境」「言葉」「人間関係」領域との接続を考察した研究[針生ら, 2016]もある。また、中1ギャップを埋めることを主たる目的とした小中連携・一体化の取り組みに関する研究としては、千葉県市原市における「市原市小中連携教育カリキュラムモデル」における「道徳」授業に焦点を当てた研究[土田ら, 2015]、「チェーン・オブ・スタディー」と呼ばれる9年間のカリキュラムの系統表を作成した宇治ひろの学園の取り組みの報告[園部, 2013]がある。

このような学校間のギャップを埋めるための連携・一体化という考え方に対しては、「在り来りな、リアリティーと切実さの欠如したもの」[助川, 2016, p.17]との批判もある。

一方で、学力向上や教育の特色化を目的とする連携・一体化に関する研究としては、道徳性や協働性に焦点を当て幼小連携を考える研究[中島ら, 2013]、市民の育成を目的と法の基礎にある考え方(リーガルリテラシー)の習得を目的とし社会科における小中一体カリキュラ

ムの構築について考察する研究[柳生ら,2016]、そして「関わる力」を学力と人間性にまたがる中核的な力とし、その力が小中の連携・一貫の中でどのように培われるかに関しての一連の研究[安藤ら,2016a,b,c,d,e]がある。

さらに、学校間のギャップの解消や、学力向上、学校の特色化等とは異なる目的の学校間連携・一体化の試みに関する研究としては、横浜市の学びの基礎力を養うことを目的としてつくられた「アプローチカリキュラム」に基づく、特別な支援を要する子どもの幼稚園から小学校への支援の連続性についての考察[本杉,2014]のように特別な支援を要する子どもに対しての援助の連続性という目的のもとに学校間連携・一体化が進められカリキュラムが開発される事例もある。

また、以上はカリキュラムの内容、すなわちどのようなカリキュラムを開発するのかという問いに関わる研究であるが、どのようにカリキュラムを開発するのかに関わる研究もある。熊本県阿蘇郡産山村における小中一貫教育のカリキュラムの開発における、教育委員会と学校、そして地域との連携の関係を明らかにした研究[仲田,2013]、生活科を中核とした幼稚園と小学校の連携を図り、カリキュラムを編成する際に「カリキュラムマネジメント」の視点から考えようとする研究[西出ら,2016]がある。

以上のように学校間連携・一体化におけるカリキュラムの編成に関しては、カリキュラムの内容に関する研究と、カリキュラムの編成の仕方に関する研究がある。カリキュラムの内容に関しては、現在のところある領域と教科、ある特質や能力の連続性といったつながりが志向され、単線的な連携、連続カリキュラムという印象を受ける。一方で、カリキュラム編成の仕方についての研究は、まだ数的にも少なく緒に就いたばかりという印象を受ける。

一方で、文科省「学習指導要領等の理念を実現するために必要な方策」[文科省,2015a]によって示された「カリキュラムマネジメント」によれば、教育課程の編成主体が学校であると明記されている。さらに、「カリキュラムマネ

ジメント」の三つの側面の一つとして、教科横断的な視点が求められている。

すなわち、この「カリキュラムマネジメント」の視点に立った時に、学校間連携・一体におけるカリキュラムに関しての研究は、二つの点で転換しなければならない。一つは、どのようなカリキュラムを編成するかという問いから、どのようにカリキュラムを編成するか問う問いへの転換である。カリキュラム編成の主体が学校であるとされる以上、研究の在り方としては、理論的にカリキュラムを構築し、それを実践に応用するという「theory into practice」[Shon,1983]の立場をとることはできない。可能な道筋は、学校教育目標、地域の現状等を共有しながら自らもカリキュラム編成の主体として、カリキュラムマネジメントのプロセスに参画し、そのプロセスを記述する「アクションリサーチ」か、カリキュラム編成の仕方もしくは「カリキュラムマネジメント」の方法について探求を行うことであろう。

2点目は、学校間の連携・一体化カリキュラムの研究から、領域、教科間横断的なカリキュラムの研究である。先に示した通り、連携・一体化のカリキュラムにおいて、学校間の横断は当然考慮されているものの、「カリキュラムマネジメント」で示されるような領域・教科間横断的なカリキュラムは示されていない。どのような、かつ、どのように領域・教科間横断的なカリキュラムを編成するのが課題である。

本稿では、いかにしてカリキュラムを編成するかという課題と、いかに領域・教科間横断的なカリキュラムを編成するのかという課題を考察する。

この考察に当たっては、三重県津市のみさとの丘学園と名張市で聞き取り調査を行った。みさとの丘学園は、2017年に義務教育学校として校区の3小学校と1中学校を併合する形で誕生した。みさとの丘学園における聞き取りは、長澤が2017年4月27日にみさとの丘学園の鈴木校長に対して行った。また、名張市は市を挙げて幼保小中の連携・一体化に取り組んでいる。名張市への聞き取りは、2017年5月2日

に、田口と長澤が、上島教育長、森永参事、西岡指導主事に対して行った。これらの聞き取りの結果と、聞き取りに際しにいただいた、資料をもとに考察を進める。

## 2. 取り組みの概要

本章では、三重県名張市における一貫教育の取り組みを中心に、前半においては小中一貫教育について、後半においては就学前教育と小学校教育の接続について論及する。

### 2. 1. 名張市における小中一貫教育の取り組み

名張市における一貫教育の取り組みのスケジュールは、平成27年度につつじが丘小学校・南中学校を「小中一貫教育研究推進校」に指定。小中一貫教育の推進のための体制づくりと周知。平成28年度、つつじが丘小学校・南中学校を「コミュニティ・スクール導入等促進事業取組校」に指定。名張市コミュニティ・スクール推進協議会の開催。導入への体制づくりと周知。平成29年度にコミュニティ・スクールのモデル校を設置、全市の小中学校においてコミュニティ・スクール設置に向けての準備開始、平成30年度にモデル校において小中一貫教育を本格実施、市内小中学校をコミュニティ・スクールとして順次設置。平成31年度に、市内小中学校において一貫教育を順次開始。そして32年度に全市小中学校がコミュニティ・スクールとなり、小中一貫教育を本格実施というスケジュールで進められる。[名張市教育委員会,2016]

名張市における小中一貫教育は、三つの背景のもと構想された。学力の課題と学校不適應の課題、そして中1プロブレムの傾向である。これらは、名張市が抱える教育課題であり、このような課題の克服のため、小中一貫が必要とされている。

さらにこのような背景は、名張市の目指す小中一貫教育の「3つの願い」として目的化される[名張教育委員会,未定稿]。一つは、9年間の一貫したカリキュラムにより、わかる授業づく

りに取り組み、学力・体力の向上を図ることである。二つ目は、学校間の情報共有や9年間の発達段階を見通すことによっていじめ・不登校・問題行動等の未然防止・早期対応に組み合わせ不適應の解消を図ることである。三つ目に、独自カリキュラムの創設による「地方創生・共生」社会を担う人としての豊かな人間性の醸成である。そしてこの三つの願いは、基礎的・基本的な知識・技能、思考力・判断力・表現力、学習意欲、体力、問題解決力等を意味する「夢を実現する力」とコミュニケーション能力、名張を愛する心、人権尊重の意欲・態度、規範意識といった「社会を拓く力」の育成による「夢をはぐくみ 心豊かで 元気な『ばりっ子』」の育成という教育ビジョンに表される[名張市教育委員会,未定稿]。

このような目的は、次の3つの取り組みによって具現化されようとしている[名張市教育委員会,未定稿]。一つは、小中一貫教育のモデル校を指定し、調査・研究を行い、その検証結果をもとに全市内で展開される小中一貫教育の導入に活かそうとする取り組みである。この取り組みは、現在、市内のつつじが丘小学校と南中学校をモデル校として平成30年度よりスタートさせようと準備中である。二つ目は、一貫教育カリキュラムの編成である。このカリキュラムは、幼児期の年長から中学校3年生までの教育の連続・接続を重視したスタートカリキュラムと、グローバル人材の育成をにらんだ名張市独自の英語教育やふるさと学習のカリキュラムの編成である。そして三つめが教職員の他校種免許状取得の推進である。教職員が小中学校で指導できるよう、県教委等と連携しながら小学校と中学校の両方の免許が取得できるよう推進している。

このような目的のもと進められる名張市における小中一貫教育の特徴は、3つある。多機関の協働・連携、地域との連携、一貫教育カリキュラムの独自性である。

「多機関協働による地域まるごと福祉・教育構想」と呼ばれる多機関や地域との連携によって小中一貫教育が進められようとしているこ

とである[名張市教育委員会,2016c]。多機関との協働では、「教福連携」という名のもと、「ネウボラ」をはじめ、教育機関と福祉機関との連携が進められている。そして、教育センターの機能を充実させ、調査研究、および教職員の研修のみならず、生涯学習センター（準備中）と連携することにより、学校教育に関わる人材の確保や学校や家庭を支援する体制を強化しようとしている。生涯学習センターとの連携においては、生涯教育の実現についてである。生涯教育は、全ての人に学びの機会を提供するだけでなく、学んだ結果を活かすことのできる社会の実現が求められる。生涯学習センターにおいて地域の人たちが研修を受け、後述の「ふるさと学習」の時間等に講師を務めることが計画されている。

次に、地域との連携は、コミュニティ・スクールの構築という形で進められている。名張市は、コミュニティ・スクールを推進する理由として、地方創生・地域の担い手づくり、地域・家庭の教育力の充実とつながりづくり、学校教育の充実の三つを挙げている[名張市教育委員会,未定稿]。さらには、名張版コミュニティ・スクール「ばりっ子応援学校」の創設として、学校運営協議会の設置等を超える独自のコミュニティ・スクールの在り方が模索されている。学校等を活用し、安全・安心な子どもの居場所を確保し、放課後や週末における様々な体験活動や地域住民との交流活動を支援する「放課後こども教室」の促進を図っている。さらに、これらのコミュニティ・スクールの機能と学校支援や学校関係者評価等の機能を一体的に推進することにより、学校運営の改善を果たすようPDCAサイクルを確立しようとしている。

三つ目にカリキュラムは、そのステージ分け（指導の区切り）と内容において特徴的である。

ステージ分けは、プレステージにあたる5歳児のステージと、小学校1年生から4年生までの前期ステージ、そして小学校5年生から中学校3年生までの後期ステージと、1・4・5の3ステージで考えられている。しかし、これは将来的には、プレステージと前期ステージを融合

させ5・5のステージ分けへと移行することが考えられている[名張市教育委員会,未定稿]。

このようなステージ分けは、小1ギャップ、中1ギャップが意識され、学校への適応をスムーズにする意図がある。例えば、後期ステージにあたる小学校5、6年生から教科担任制を段階的に実施するなどして、異なる学習スタイルへの移行をスムーズに行えるよう考慮している。対照的に、三重県津市の義務教育学校、みさとの丘学園では、6・3のステージ分けをとっているが、これは施設一体型の義務教育学校では学校間のギャップが生じにくいと考えられているからである。

それぞれのステージの位置づけ、そこで育成する力としては、プレステージでは、遊びを通して学びの基礎を育成するステージと位置づけられる。前期ステージでは、生きて働く「知識・理解」の基礎の習熟を図ることが目標となる。さらに、後期ステージでは、「知識・理解」の活用を通して「思考力・判断力・表現力」の育成が図られる。また、「学びに向かう力・人間性」の育成も図られる。このように、前期ステージと後期ステージにおいては、「知識・理解」、「思考力・判断力・表現力」、そして「学びに向かう力・人間性」と、次期学習指導要領の三つの柱をにらんだものとなり、三つの柱のうち、前期が「知識・理解」を後期が残り二つの柱を中心に置いている点は特徴的である[名張市教育委員会,未定稿]。

また、カリキュラムの内容面での特徴としては、独自に英語教育カリキュラム、「なばり学」カリキュラム、キャリア教育カリキュラムを編成していることである。

英語カリキュラムは、「聞くこと」「話すこと」を中心として小学校低学年からコミュニケーション能力を養うことを目的としたカリキュラムが編成されている。小学校高学年から中学校にかけては、「聞くこと」「話すこと」に加え「読むこと」「書くこと」などのコミュニケーション能力を総合的に育成しようとしている。

また、小中一貫教育として行われるキャリア教育では、異学年交流、保護者や地域住民との

交流を通して、自己肯定感や人と関わる意欲や関わる力を育てることが目的とされている。さらに、企業や高等学校との連携も計画されている[名張市教育委員会,2016a]。

そして三つ目に、「なばり学」は、「社会に開かれた教育課程」として創設されている[名張市教育委員会,2016b]。「なばり学」は、名張の自然や歴史、伝統・文化、産業、人等について9年間を通して学ぶ、ふるさと学習である。この学習に当たっては、地域人材講師による授業はもとより、副読本の作成にあたっては地域の人材が活用されている。また、このような人材の育成に当たっては、記述した生涯学習センター等との連携が図られる。こうして、社会に開かれることにより、地域の人材によって作られるカリキュラムとなっている。このカリキュラムにより、名張を大切に思い、自然を守り、伝統や文化を引き継いでいく一人という意識を子どもたちに育てようとしている。(1~2.1.長澤担当)

## 2. 2. 1 就学前教育と小学校教育の接続が注目されるに至った過程

就学前教育においては子どもが遊びや生活を通して今後の学びの基礎となる力を育てる教育の方法をとってきた。幼稚園教育要領では「幼児期の教育は、生涯にわたる人格形成の基礎を培う重要なもの」であり、「遊びは心身の調和のとれた発達の基礎を培う重要な学習」であるとしている。この考え方は保育所、認定こども園の教育の考え方と共通し、一貫して変わらない。

近年になって就学前教育で身につけた幼児の育ちが小学校以降の教育につながっていくことの重要性が強調されるようになった。その背景には小1プロブレムに代表されるような就学期の子どもへの戸惑いの現状や子どもの育ちの連続性への注目にある。平成29年3月に告示された幼稚園教育要領では「幼稚園教育において育まれた資質・能力を踏まえ、小学校教育が円滑に行われるよう、小学校の教師との意見交換や合同の研究の機会などを設け“幼児期

の終わりまでに育ってほしい姿”を共有するなど連携を図り、幼稚園教育と小学校教育との円滑な接続を図るよう努める」としている。同時に告示された保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領のいずれにおいても同様の記述がなされた。

しかしながら就学前教育と小学校教育との「連続」は容易ではない。義務教育ではないこと、教育の方法が異なること、多様な就学前教育施設があること、私立園が多くそれぞれに特色を持った教育・保育の展開をしていること、管轄が異なること等、多様性が「連続」を困難にしている。

一方ではほぼすべての幼児が就学前教育施設を経て就学する現実を考えると、どの子ども期待をもって小学校入学ができ、小学校生活を楽しみ、充実した学びへの移行が保障されることが重要な課題になる。そこで、今回の幼稚園教育要領、保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領の改訂ではいずれにおいても「小学校教育との接続」を重要な課題の一つとして取り上げた。

## 2. 2. 2 新たに要領・指針が示した就学前教育と小学校教育の接続の方向性

新幼稚園教育要領が示した具体的な記述として2点あげられる。一つは「幼稚園教育において育みたい資質・能力」として「知識及び技能の基礎」「思考力、判断力、表現力等の基礎」「学びに向かう力、人間性等」を明らかにしたことである。二つ目には、本研究の「連続」を追究するうえで重要となる「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を掲げたことである。それは①健康な心と体、②自立心、③協同性、④道徳性・規範意識の芽生え、⑤社会生活との関わり、⑥思考力の芽生え、⑦自然との関わり・生命尊重、⑧数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚、⑨言葉による伝え合い、⑩豊かな感性と表現、である。これについても改訂の保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領のいずれにも記載されている。つまり、上記3つの「育みたい資質・能力」と、10の「幼

「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」は、どの就学前教育施設でも同じように育みたい幼児期の「資質・能力」であり、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」とした。無論それらは就

る。「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を示したうえで、具体的方法は各地・各園(校)の取り組みに委ねる。

平成 28 年度 1 年間の検討を経て、三重県教

5歳児後半					接続のキーワード	1年生1学期		
育成する力	5領域	育ってほしい姿	幼児の姿(内容)	指導の留意点	(15項目)	児童の姿(内容)	指導の留意点	育成する力
生活する力	健康	健康な心と体、自立心	・・・	---	充実感、見通し、満足感他	・・・	---	豊か 生きる 心、 (健 かな かな 学力) 体、
かかわる力	人間関係	協同性、道徳性の芽生え、社会生活	・・・	---	思いや考えの共有、工夫や協力他	・・・	---	
まなぶ力	環境・言葉・表現	思考力、自然、数量、言葉、表現	・・・	---	事象へ積極的に関る、自然に触れる他	・・・	---	

(図1) 三重県教育委員会「保幼小接続カリキュラム構成案」2017.1 (田口作成イメージ図)

学前教育のこれまでの方法・内容、つまり遊びや生活を通して総合的に培うことには変りがない。

一方小学校教育における就学前施設との連携の考え方はどのようになっているのか。新たな小学校学習指導要領では以下のように述べる。「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿を踏まえた指導を工夫することにより、幼稚園教育要領等に基づく幼児期の教育を通して育まれた資質・能力を踏まえて教育活動を実施し、児童が主体的に自己を発揮しながら学びに向かうことが可能となるようにすること」「特に、小学校入学当初においては、幼児期において自発的な活動としての遊びを通して育まれてきたことが、各教科等における学習に円滑に接続されるよう、生活科を中心に、合科的・関連的な指導や弾力的な時間割の設定など、指導の工夫や指導計画の作成を行うこと」としている。

ここに至って、就学前教育と小学校教育を連続させる、現行制度における方向性が整ったといえる。

### 2. 2. 3. 就学前教育と小学校教育の接続カリキュラム試案作成への取り組み

国は接続カリキュラムの編成には言及していない。連携・接続の重要性を指摘するに留ま

育委員会は保幼小接続カリキュラム構成案を、名張市教育委員会は「しっかりつなぐ育ちのバトンカリキュラム～接続期の子どもの育ちについて考える～」を検討している。これらのカリキュラム試案は、平成 29 年 3 月に告示された幼稚園教育要領、保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領に示された先述 3 つの育みたい資質・能力と、10 の幼児期の終わりまでに育ってほしい姿を念頭においている。

幼児・児童を中心とした保幼小連携活動、保育者・教員相互の相互研修はこれまでも多く取り組まれてきたが、接続カリキュラムを策定して就学前教育と小学校教育の内容・方法を接続させる取り組みの例はさほど多くはない。本研究では上記 2 つの接続カリキュラム(試案)および、茅野市教育委員会が平成 28 年 1 月に木村吉彦の監修のもと明らかにした「育ちと学びをつなぐ接続期カリキュラム」を加えて検討する。

### 2. 2. 4. 三重県教育委員会保幼小接続カリキュラム構成案 [三重県教育委員会,2017] について (註 1)

三重県教育委員会は保幼小接続カリキュラム構成案を保・幼代表者、研究者、研究機関、

保護者、行政等からなる検討委員会で検討し、作成している(図1)。カリキュラム(案)の特徴は、遊びや生活を重視した就学前教育の基本を尊重していること、幼児教育の5領域を意識し

の就学前教育を尊重し、柔軟性をもたせたため、スタンダードとして示した場合多くの園(所)で受け入れられやすいものになっている。

分野	5歳児				1年生			教科
	I期	II期	III期	IV期	I期	II期	III期	
	4~5月	6~8月	9~12月	1~3月	4~5月	6~11月	12~3月	
ことば	・・・	・・・	・・・	・・・	・・・	・・・	・・・	国語
かず	・・・	・・・	・・・	・・・	・・・	・・・	・・・	算数
からだ	・・・	・・・	・・・	・・・	・・・	・・・	・・・	体育
しぜん	・・・	・・・	・・・	・・・	・・・	・・・	・・・	生活
やくそく	・・・	・・・	・・・	・・・	・・・	・・・	・・・	道徳
つながり	・・・	・・・	・・・	・・・	・・・	・・・	・・・	特活他

「・・・」の枠に取り組みことが望まれる活動内容を2~3項目掲げる。

(図2) 名張市しっかりつなぐ育ちのバトンカリキュラム試行版2017.1(田口作成イメージ図)の編成であること、今回要領等の改訂で示された“幼児期の終わりまでに育ってほしい姿”を位置づけたこと、小学校教科とは敢えて接続させず“育成する力”として連続させたこと、5歳児後半から1年生1学期を接続期にしたところである。三重県教育委員会作成のカリキュラム(案)の構成はおおむね下記のとおりである。

5歳児後半の内容の「・・・」は幼児期後半身に付くことが望まれる心情・意欲・態度を示す。小学校1年1学期内容の「・・・」は学校生活に慣れること、決まりを守り安全に過ごすこと、興味を持ってやってみようとするなど、意欲を持って学校生活を送ることを示す。

三重県教育委員会のカリキュラムは、幼稚園教育要領、学習指導要領の改訂の主旨を踏まえ、①知識や技能、②思考力・判断力・表現力、③学びに向かう力・人間性、の3つの柱を意識して5歳児後半のカリキュラムに「まなぶ力」「かかわる力」「生活する力」を位置づけた。また、新たな幼稚園教育要領で示されることになる「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の10項目もカリキュラムに示した。

小学校1年生の1学期の取り組みとしては敢えて「教科」に直結させないで、学校生活全般を通して培うべき「生きる力(健やかな体、豊かな心、確かな学力)」につながる心情・意欲・態度として、就学前教育と整合性をもたせた。

三重県教育委員会のカリキュラムには現行

2. 2. 5. 名張市教育委員会「しっかりつなぐ育ちのバトンカリキュラム~接続期の子どもの育ちについて考える~(案)」[名張市教育委員会,2017]について(註2)

名張市教育委員会は平成28年4月から3年間、文部科学省の委託を受けて「幼児教育の推進体制構築事業」を実施している。その事業の一つとして「幼児教育と小学校教育の接続カリキュラム」について検討する。

名張市においては幼小中一貫教育(5・5制/5歳児・1・2・3・4年・5・6・7・8・9年)を想定した中での「5歳児の幼児教育と小学校1年生教育の接続カリキュラム」であるとした(図2)。将来的には5歳児の教育は無償化・義務化に向かうことになると思われるが、それを先取りする案と考えられる。市の示した案の詳細は略すがおおむね以下の枠組みになっている。

就学前教育で重視する遊びや生活は「総合的な営みであって分割して考えることには馴染まない」とされているが、名張市は敢えて就学前教育の内容が小学校教育においてどのように接続するのかを単純明瞭に示した。例えば「かず」においては5歳児I期「指さしのリズムと言葉のリズムが合うように、1対1対応させて数える遊びをする」とし、小学校1年生1期算数では「“なかまづくりとかず”で絵に数図ブロックを1対1で対応させて置いて数え、数字で示す」として具体的である。

名張市が5歳児の遊びや生活を通して具体

的な活動（具体的な学び）を取り出し、小学校教科とつなげようとする背景には、幼小中一貫教育（5・5制）として組み込もうとするプレスクールの発想がある。就学前教育は大きく分

研究が基になって、平成21年度に「茅野市保小連携推進委員会」が発足し、接続期カリキュラムへの取組みが本格化した。

平成28年度に木村吉彦（上越教育大学大学

三つの力	5歳児（10月～3月）		接続期の子どもにとっての 段差		1年生		学力の要素
	内容	指導のポイント	段差	段差	4月	5～7月	
			（幼・保）	（小学校）	指導のポイント		
生活する力	・健康な生活 ・生活への適応 ・心身の自立	「早寝・早起き・朝ごはんの」大切さを保護者に呼びかける。 ・・・	促されて就寝・起床することが多い。 ・・・	就寝・起床を自分でできるようにする。 ・・・	一人一人の入学への期待感や不安な気持ちに寄り添う。 ・・・	生活を振り返り、自分の成長を自覚できるようにする。 ・・・	自立
かかわる力	・人とのかかわり ・きまりを守る ・言葉で伝え合う	生活に必要な挨拶をしたり感謝の気持ちを言葉で伝えたりする。 ・・・	誰かがそばにいて一緒にしてくれる。 ・・・	自分で進んでする。 ・・・	集団ゲームをとおして、新しい友だちとの関係をつくる。 ・・・	活動をとおして、互いのよさが分かり合えるようにする。 ・・・	協働
学びの力	・豊かな体験 ・豊かな表現 ・文字、数、色、形への興味関心	興味・関心のあるものに夢中になれるようにする。 ・・・	自分の好きな自由遊び中心 ・・・	集団でのルールのある活動、教科学習 ・・・	ルールを守りながら友だちと一緒に遊ぶ楽しさを知る。 ・・・	ルールを守ることや責任をもつことの大切さを知る。 ・・・	創造

（図3）茅野市接続期カリキュラムモデルプラン2016.1（田口作成イメージ図）

けて①遊びを通して教育を行う幼稚園教育の系譜、②保健とケアを中心とした保育の系譜、③就学前教育（プレスクール）の系譜、があるとする[佐藤,2017]。③については日本では主流ではないが、海外では一般的である。

今後上記の「しっかりつなぐ育ちのバトンカリキュラム試行版（案）」は今後1年をかけて市内試行園（幼稚園2園、保育園1園、計3園）で実施され検証することになる。

## 2. 2. 6. 茅野市教育委員会「育ちと学びをつなぐ接続期カリキュラム」[茅野市教育委員会,2016]について

茅野市教育委員会では平成16年度より就学前教育から小・中学校教育に至るまで「読書活動」に取り組んできた経緯と、平成14年度から一部地域で行われた小学校と園による共同

院教授）の監修のもと、接続期カリキュラムモデルプラン（図3）を著した。カリキュラムの特徴は就学前教育における「生活する力」「かかわる力」「学びの力」が小学校教育における学力の3要素としての「自立」「協働」「創造」につながるとしたこと、接続期の子どもにとっての段差を具体的に示したこと、小学校1年時期の取組みを4月と5～7月に細分化したことなどがあげられる。

茅野市教育委員会のカリキュラムは、幼児期に培いたい力を3つとし、それが小学校期の学力の基礎となる3つの力につながるとしたこと、接続期の課題を考えたことは三重県教育委員会の示すカリキュラムの考え方につながる所がある。（2.2.1.～2.2.6.田口担当）

## 3. 考察



### 3. 1. カリキュラムマネジメントの観点から —いかにしてカリキュラムをつくるか—

名張市の小中一貫教育の取り組みにおいては、「社会に開かれた教育課程」が意識されている。文科省教育「教育課程企画特別部会論点整理（案）」[文科省,2015b]によれば、「社会に開かれた教育課程」を構築するにあたっては、3つの点が重要であるとされている。「社会や世界の状況を幅広く視野に入れ、よりよい学校教育を通じてよりよい社会づくりを目指すという理念を持ち、教育課程を介してその理念を社会と共有していくこと」、「これからの社会を創り出していく子供たちが、社会や世界に向き合い関わり合っていくために求められる資質・能力とは何かを、教育課程において明確化していくこと」、「教育課程の実施に当たって、地域の人的・物的資源を活用したり、放課後や土曜日等を活用した社会教育との連携を図ったりし、学校教育を学校内に閉じずに、その目指すところを社会と共有・連携しながら実現させること」の3つである。名張市の小中一貫教育において、「なばり学」やキャリア教育が、この3点を考慮した「社会に開かれた教育課程」であると言える。

また、名張市の小中一貫教育におけるカリキュラムの「社会へ開かれた教育課程」という特質は、いわゆる「馳プラン」[文科省,2016]において示された、地方創生と学校改革の一体化の推進の一つの具体的な姿でもある。

総じて、名張市における小中一貫教育は、地域に開き、地域とともにあることによって成り立っている。「なばり学」については、既述したように、その編成に地域の力を借りている。また、「カリキュラムマネジメント」という観点からいえば、現在PDCAサイクルを回すための仕組みが整備されているわけではないが、カリキュラムについての意見が地域から上がってきていると名張市教育長は述べる。すなわち、教育課程を地域に開くこと自体が、カリキュラム編成のPDCAサイクルを確立することにつながっており、カリキュラムをいかにつくるかという観点からは、カリキュラムを社会に開き、

学校を地域とともにある存在として位置づけなおしていくことが重要であると指摘することができる。（3.1.長澤担当）

### 3. 2. 就学前教育と小学校教育の接続カリキュラム検討で明らかになること

就学前教育と小学校教育の接続カリキュラムは三重県教育委員会と茅野市教育委員会はいずれも、幼児期の生活のあり方と教育の内容を含めて接続を考えるとところに共通性がある。そこでは、遊びや生活を通して学びの基礎を培うという従来の就学前教育の基本を重視した接続カリキュラムの構想がある。

小学校以降の教育は教科学習が中心であり、学びの段階を細分化して全員の理解を促す方法をとる。一方就学前教育は、自ら選んで行う活動の中で、あるいは遊びや体験を通して、一人ひとりが異なる学びを一体的に得るところに特徴がある。5領域の概念はあるものの教科的な発想とは異なる。従って二つのカリキュラムは「生活と学びをつなぐカリキュラム」と言える。就学前教育現場も受け入れ易いカリキュラムになっている。

一方名張市教育委員会のカリキュラムは幼児期において遊びや生活を重視しつつも、例えば遊びの中で1対1対応を考えることが小学校1年生算数教科の学習内容とどのようにつながるのかを、具体的に示すものになっている。このアプローチは今まで表立って検討されてこなかった視点である。具体的、部分的である感があり、受けとめ方によっては幼児教育者中心の指導に陥る危険性を含み、就学前教育のあり方と相反すると考えるからである。

しかし一方では子どもの遊びや生活の中で体験することが後の教科教育の学びとどのようにつながるのか明示している点では今日的視点である。ここでは遊びや生活を通した幼児の発見、気づき、疑問、試行錯誤などが後の学びの内容とどのようにつながるのか、幼児教育者に考えることを問いかける「学びをつなぐカリキュラム」と言える。総合された遊びや生活を分析的に見ることの重要性を指摘している。

### (3.2.田口担当)

#### 4. おわりに

名張市の取り組みを考察することにより、就学前から、義務教育終了段階におけるまでの一貫したカリキュラムの流れについてみる事ができた。

カリキュラムの編成における社会・地域とのかかわりの重要性を指摘した。そして、及び幼保小連携カリキュラムにおいては、生活と学びをつなげる、もしくは遊びと学びをつなげるという「学びをつなげるカリキュラム」という単に学校種間をつなげるという発想ではなく、そこで営まれる子どもたちの学びをつなげるという発想の重要性を指摘した。

しかしながら、今回議論の俎上に載せた取り組みにおいて、まだ明らかとなっていない言葉が二つある。一つは、カリキュラムマネジメントであり、もう一つはアクティブラーニングである。カリキュラムマネジメントにおいて、PDCA サイクルの確立が求められるが、その際の D(do)の部分に占めるのがアクティブラーニングである。その意味では、カリキュラムマネジメントとアクティブラーニングは関連付けて考える必要がある。また、次期指導要領では、カリキュラムの連続・接続以前に、幼稚園から大学まで「アクティブラーニング」で学び方を連続させるということが志向されている。その意味で、学校間の連続・一体化を問うことは、カリキュラムを問うことと同時に、アクティブラーニングという学び方の連続を一つの観点として問うことも必要であろう。

カリキュラムマネジメントとアクティブラーニングが、今後学校間の接続・連続・一体化といったとき、どのように作用していくのか今後の課題としたい。(4.長澤担当)

#### 註

1. 2017年1月、取りまとめ過程にある三重県教育委員会の保幼小接続カリキュラム構成案について事務局担当者から田口が非公式に意見を求められた。その時点での「案」について

の論及である。

2. 田口は名張市幼児教育の推進体制構築事業実行委員会委員として平成28年度年間3回の協議に臨んだ。2017年1月段階で示されたカリキュラム「案」についての論及である。

#### 謝辞

本論文を取りまとめるにあたって名張市教育委員会教育長上島和久様はじめ事務局担当者様、津市立みさとの丘学園校長鈴木智巳様、三重県教育委員会事務局担当者様には聞き取り・資料提供等のご便宜を図っていただくと共に、論文の校閲をいただき、感謝申し上げます。

#### 文献

赤木信介・田部綾子・石川衣紀・内藤千尋・高橋智,2016,就学前教育と小学校の接続・連続に関する調査研究 -「松江市保幼小接続カリキュラム」の検討を通して,東京学芸大学紀要総合教育科学系Ⅱ 67,pp.53-68

安藤真二・鶴戸周成・瀬戸山由香里・河原国男,2016a,「かかわる力」を育成する幼小中一貫教育の活動とその特質 (その1) -宮崎大学教育文化学部附属学校園の取組①「かかわる力」の目標系統表とその成立経緯を中心に、宮崎大学教育文化学部附属教育協働開発センター研究紀要 第24号, pp.123-138

安藤真二・鶴戸周成・福島裕子・河原国男,2016b,「かかわる力」を育成する幼小中一貫教育の活動とその特質 (その2) -宮崎大学教育文化学部附属学校園の取組② 主たる目標事項とする活動において - ,宮崎大学教育文化学部附属教育協働開発センター研究紀要 第24号, pp.139-147

安藤真二・鶴戸周成・福島裕子・河原国男,2016c,「かかわる力」を育成する幼小中一貫教育の活動とその特質 (その3) -宮崎大学教育文化学部附属学校園の取組③「附属ならではの」特徴的な活動において - ,宮崎大学教育文化学部附属教育協働開発センター研究紀要 第24号, pp.149-160

- 安藤真二・鶴戸周成・河原国男,2016 d, 「かかわる力」を育成する幼小中一貫教育の活動とその特質 (その4) - 宮崎大学教育文化学部附属学校園の取組④ 「交流及び共同学習」の実践 - , 宮崎大学教育文化学部附属教育協働開発センター研究紀要 第 24 号, pp.161-172
- 安藤真二・鶴戸周成・福島裕子・河原国男,2016e, 「かかわる力」を育成する幼小中一貫教育の活動とその特質 (その5) - 宮崎大学教育文化学部附属学校園の取組⑤ 「好きな遊び」(幼稚園)・各教科(小・中学校)・教育実習に関する基盤的な実践 - , 宮崎大学教育文化学部附属教育協働開発センター研究紀要 第 24 号, pp.173-189
- 伊勢正明,2016,生活科の指導内容・方法が示す保幼小連携のモデル,帯広大谷短期大学紀要 53,pp.67-76
- 岡林典子・砂崎美由紀・山崎菜央・深沢素子・難波正明,2014,幼少をつなぐ音楽活動の可能性:京都幼稚園と京都女子大学付属小学校1年生の実践をふまえて,京都女子大学発達教育学部紀要 10,pp.77-86
- 茅野市教育委員会,2016,育ちと学びをつなぐ“幼保小連携教育”の挑戦-接続期カリキュラム-,ぎょうせい
- 佐藤学, 2017,学び育ち合う子どもの権利と保育者の専門性について,平成 28 年度全国保育士養成協議会中部ブロック第 21 回セミナー報告書,pp.8-13
- 助川晃洋,2016,「小中一貫教育ならでは」の学習指導実践による「確かな学力」の育成(その1)兵庫県神戸市立港島小・中学校(港島学園)の取り組みに関する事例的考察,教育学論叢 33,国士舘大学,pp.75-92
- 園部敏英,2013,宇治ひろの学園の小中一貫教育:小・中学校の円滑な接続と一貫した指導を通して(京都の教育),京都教育大学大学院連合教職実践研究科年報 2,pp.194-199
- 土田雄一・川添幹貴・尾高正浩,2015,小中連続道徳授業の省察 ~市原市 A 中学校区での実践分析から~,千葉大学教育学部研究紀要 63,pp.213-224
- 中島朋紀・東ゆかり・佐藤康富・荒松礼乃・西島大祐・島崎真由美・白川桂子,2013,幼小連携のカリキュラムについての研究-「道徳性」「共同性」の育成-,鎌倉女子大学学術研究所報 13,pp.1-8
- 仲田康一,2013,教育委員会と学校の連携による小中一貫カリキュラムの開発-熊本県産山村における教育改革の展開から-,東京大学大学院教育学研究科教育行政学叢書 第 3 3 号, pp. 247-256
- 名張市教育委員会, 2016a, 名張市がめざす「夢を実現する力」「社会を拓く力」を育む小中一貫教育
- 名張市教育委員会, 2016b, 名張市教育振興基本計画 名張市子ども教育ビジョン 社会を拓く次世代のための新たな教育を目指して
- 名張市教育委員会, 2016c, 教福連携 名張サミット 2016 記録集
- 名張市教育委員会, 2017, しっかりつなぐ育ちのバトンカリキュラム
- 名張市教育委員会,未定稿,名張市におけるコミュニティ・スクールを基盤とした小中一貫教育の推進について
- 西出勉・山下由紀夫・石塚雅之, 2016, 生活科を中核としたカリキュラムマネジメントに関する一考察 ~保幼小連携活動:「カレーパーティ」の実践事例を通して~, 北翔大学教育文化学部紀要創刊号,pp.129-144
- 針生弘・久能和夫・郡山孝幸・金賢植・柴田千賀子,2016,学びの連続性及び幼小連携の視点から見た生活科学習についての一考察,仙台大学紀要 47,pp.57-65
- 本杉和美,2014, 特別な支援を必要とする子ども達のよりよい移行支援を めざして: 幼・小連携を通して,静岡大学 教育実践高度化専攻成果報告書抄録集. 4, pp. 109-114
- 三重県教育委員会,2017,保幼小接続カリキュラム構成案
- 文部科学省,2015a, 学習指導要領等の理念を実現するために必要な方策, [http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chuky/o/chukyo3/siryo/attach/1364319.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chuky/o/chukyo3/siryo/attach/1364319.htm),2017 年

[5月2日](#) アクセス

文部科学省,2015b,教育課程企画特別部会  
論 点 整 理 ( 案 ),  
[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo3/004/siryo/attach/1362063.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/004/siryo/attach/1362063.htm),20

[17年5月2日](#) アクセス

文部科学省,2016,「次世代の学校・地域」創生  
プ ラ ン ( 馳 プ ラ ン ) ,  
[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/houdou/28/01/\\_icsFiles/afieldfile/2016/01/26/1366426\\_2.p](http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/28/01/_icsFiles/afieldfile/2016/01/26/1366426_2.pdf)

[df.2017年5月2日](#) アクセス

柳生大輔・伊藤公一・棚橋健治・木村博一,2016,  
国際的な資質を育成する小中一貫型社会科学  
習ーリーガルリテラシーの視点からー,広島大  
学学部・附属学校共同研究機構研究紀要

44,pp.259-268

Schon.D.,1983,The reflective practitioner,  
Basic book,佐藤・秋田訳,専門家の知恵 反省  
的实践家は行為しながら考える,ゆるみ出版

ながさわたかし 鈴鹿大学短期大学部 准教  
授

Email:nagasawat@suzuka-jc.ac.jp

たぐちてつひさ 鈴鹿大学 教授

Email:taguchit@suzuka-jc.ac.jp

# Curriculum Organization within the Context of Integration and Sequentiality of Learning Experiences

: A Study of Policies Implemented by the City of Nabari in Mie Prefecture in order to Integrate the Education System

Takashi NAGASAWA

Tetsuhisa TAGUCHI

## Abstract:

In recent years, the number of debates about the collaboration between institutions devoted to different level of education as well as the integration and sequentiality of learning experiences have impacted the research on curriculum organization. Actually, research on curriculum organization has reached a turning point, especially since the introduction of curriculum management in the next educational guidelines by the Japanese government. This can be explained by two reasons. First, research addressing the creation of a curriculum based on a transversal approach to learning has been in high demand in order to reflect the needs of creating curricula that do not only emphasize a collaboration between educational institutions, but also a transversal approach between disciplines and within textbooks. Second, educational institutions are now responsible for the organization as well as the content of their curriculum. This situation obviously changes how researchers consider curriculum organization and management. In this paper, we will take into account these two issues through an analysis of the policies implemented by the city of Nabari in Mie prefecture.

## Keywords :

Collaboration between pre-school and elementary school, integration of elementary school and junior high school, curriculum organization, curriculum management, community school